

イタリアと日本 歴史が作った暮らしとインテリア

生活環境デザイン学科 雨 宮 勇

I. 戦争と平和のインテリア 1

1.1 端(ハシ)の国、日本

ユーラシア大陸東端の国日本と西欧の中心にある国イタリア、西欧版の世界地図では日本は東の端の国である。中国で生まれた文明は周辺である日本に伝わったが、その東は大きな太平洋で日本は端の国として、江戸時代は300年の鎖国の歴史を持つことが出来た。

今回、歴史の素人である筆者があえてこれを確認するのは、日本とイタリアの大きな相違点が歴史だと思うからである。

日本の鎖国は、日本人の生活と文化に決定的な影響を与えた。世界史において、他民族からの侵略が起きていないという日本史は、不思議な歴史だと言っていいだろう。もちろん蒙古襲来における対馬や、第2次世界大戦末期の空襲や原爆投下はあった。だが、本土決戦を回避できた日本人には、それらは台風や地震のような天災以上には映らなかったのかもしれない。侵略軍に目の前で家族や知人を殺され、町を破壊された歴史はどの民族にもある。沖縄や南西諸島の歴史は悲惨だが、大部分の日本人にはその記憶がない。

1.2 橋(ハシ)の国、イタリア

一方のイタリアは橋(ハシ)の国である。ローマ時代には地中海世界を大統一した歴史を持っている。地中海を東西に2分するイタリア半島は、支配するには好都合な中心的立地環境を持っていた。しかし、逆にアフリカとヨーロッパの架け橋であるイタリアは、他国に支配されたり、小さな国々に別れて戦争を繰り返してきた(図1)。(東洋でこの橋型の地勢に似ているのは朝鮮半島であるが、朝鮮半島との比較は、別の項に譲りたい。)

そのイタリアが統一されたのが日本の明治維新と同じ頃というのは、前に触れた。この時代、ヨーロッパはどの国も同じ頃に新しい国民国家をスタートさせている。

1.3 戦争と平和のつくるもの

ところで、この日本の平和と、イタリアの戦争の歴史とでは、両国の都市や建築物、そして暮らしやインテリアに大きな違いを与えた。

第二次世界大戦での日本の状況は上に書いたが、イタリア国内では、南に上陸した連合軍とイタリア・ドイツの同盟軍



図1 19世紀前半のイタリア

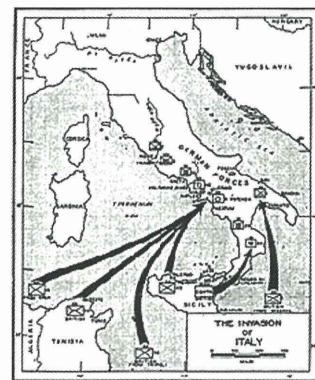


図2 連合軍の侵攻経路

による戦争がイタリア国内を南から北に戦線が移動する形で行なわれた。(この辺りは、多くのイタリア映画に表現されている。※1) この内戦とも言うべきものは、イタリア統一時での主に北から南への戦線の移動と逆になったものだが、ここではまさに友人知人の殺される状況が繰り返された。イタリアでのこのような状況は、別にこの時代に限ったものではない。その多くは都市国家間の戦い、そして近代では他国(中世以降では、スペイン、フランス、ドイツ、オーストリアなど)からの侵略によるものだ。日本が他国から侵略されたのは第二次大戦後のアメリカ軍によるものだけである。

この違いが、後から出てくるイタリアでの丘上(きゅうじょう)都市や中庭の発達の原因になり、日本での平地都市や、大きな開口部を持つ住居の発達等に繋がるわけである。まずはイタリアの丘上都市から見ていこう。

1・4 車窓から眺めると

車窓から眺めるイタリアの田園風景は美しい。都市を出発した電車はすぐに田園の中を走り始める。イタリアの車窓風景は都市と田園が実にはっきりしている。3～5階の集合住宅の密集地が途絶えと後はきれいさっぱり平原になる。これは近代まで人々が石を積上げた都市壁の中に集まって生活をしてきたからである。都市は都市壁までで、そこを一步出ると農地を中心とした平原地帯になる。



写真1 トスカーナの平原

日本では、車窓にいつまでも家屋の建ち並ぶの見える。はっきりした都市壁を持たなかった日本では、簡単に取り外しの出来る町の板囲いはずして、外へ外へと平屋の家を作ってきた。幕末に来日した西欧人の記録(※2)には江戸の町が平屋の住居が延々と続いている状況にびっくりしているのが読み取れる。江戸時代、日本のどこの都市でもそのような延々と広がる平坦な田園都市を作っていたようである。



写真2 キュースィ(トスカーナ州)の遠景

1・5 日本の集落は田園の点景

イタリアの田園風景には、集落の混ざることが少ない。現代では、ぽつぽつと農家らしきものが見えるが、それらは集落を構成していない。農作業のための倉庫や夏の仮住まいになっている場合が多いようだ。

車窓から眺めるイタリアでは、都市域は突然現れるのである。都市と、農地や森林とが確然と分かれている。

日本の風景も境界がはっきりしていると言われてきたが、これは農地と森林との境がはっきりしているということである。水田を主として考えた日本の農地は、水平面を必ず

作っている。ゆえに森林地域の傾斜地と農地とは明確な境を作ってきた。ところが、農地と集落にはその区分けが判然としない。集落は農地の間に数戸から数十戸が平屋で建ち並び、それらは田園に溶け込んで独特の日本の景観を作ってきた。

1・6 丘の上の都市

これに対するイタリアの農地と森林は、どちらも傾斜地にあったり平地にあったりと区分けが判然としない。ところが一旦集落が始まると、集落は密度の高い都市域を構成する。昔はここに城壁が築かれていて、その名残を都市のあちこちで見ることが出来る。現代ではその都市壁を超えて集落が広がっているのがわかるが、むやみに広がるのは法律で抑えられている。時間をかけて計画され審議された上で許可が出る。だから現代でも都市は突然途絶えて、平原になる。

車窓から眺めていると、その唐突さが新鮮である。そして、平原が突然都市になる場合も驚きののだが、それ以上にドラマチックなのは、田園風景の向こうの、小さな山の上に現れるときだ。



写真3 ウンブリア州トゥレーヴィ

丘の上にびっしりと住居の建ち並ぶ姿は雄大である。その一番高いところに町の中心教会のドームが見え、丘全体が完成度の高い都市の塊として視界に迫ってくる。それは田園に浮かぶ軍艦のようだ。これがイタリアの丘上都市である。

※1：代表的な映画に、ロッセリーニ監督の「戦火のかなた」、「無防備都市」、タヴィアーニ兄弟の監督による「サン・ロレンツォの夜」

※2：「逝きし世の面影」からの抜書き p447～448 渡辺京二著 平凡社刊

オールコック（初代駐日イギリス公使）が江戸について、「ヨーロッパには、これほど多くのまったく独特のすばらしい容貌を見せる首都はない」と述べたことの意味を、ようやくわれわれは理解する。江戸はバリやローマや、あるいはロンドンやウィーンのような、大廈高樓を連ねた壮麗な都市ではなかった。江戸にそういうものを求めた観察者は、残らず深い失望を味わった。江戸の独自性は都市が田園によって浸透されていることにあった。だから欧米人たちは江戸と郊外の境目がわからなかったのである。都市はそれと気付かぬうちに田園に移調しているのであった。

2 戦争と平和のインテリア2

2.1 町は城壁で囲まれていた

イタリアで、町や集落の外敵への防御として作られるのが都市壁（市壁）である。農業を主とする集落でも住民はみな固まって居住していた。集落が大きくなって町に発展するが、その



写真4 オルビエート（ウンブリア州）

発展には市壁が不可欠であった。外敵に攻められ難くすること、それが市壁の存在である。今でもその一部を見ることが出来るが、町の周囲をぐるりと丈の高い厚い壁で囲んでいる。(写真4)

しかし、その建設には大変なコストがかかる。できたら短い市壁で囲みたい。しかしそれでは町の面積は小さく限定されてしまう。

2・2 フィレンツェの市壁の拡張

イタリアの京都と呼ばれるフィレンツェ。そのフィレンツェは平地の大都市である(写真5)。しかし、最初は丘の上の町フィエゾレの壁外集落として存在していた。ところが、集落が都市に発達するには防衛のための市壁が必要である。1回目の市壁は古代ローマ時代にローマの植民都市として作られたものである。南北400m、東西500mぐらいのはなはだ狭い矩形をなしている。これはもう崩されて無いのだが、今の地図でもその形が容易に推測できる。

この町は、交通が発達してくるとローマから北に上る交通の要衝となって、人口が増えてくる。

そこで2回目の市壁をその外のアルノ川方向に拡張して(11世紀)面積の拡大を図った。この頃の発展は急激で、次の3回目の拡大はすぐ後の12世紀に行われ、4倍の大きさに拡大。そして13世紀の6回目には、そのまた5倍以上の大きさにまで拡大して堅固な市壁を作っている(図3)。

これらを成しえたのは、フィレンツェが経済的に強大になっていったからである。市壁の建設は大変な事業であって、全ての都市で市壁の拡大が可能であったわけではない。

2・3 イタリア人は丘の上に住んでいる

ところでイタリアを旅する者にとって、フィレンツェやミラノなどの平地の都市への訪問が多いのだが、イタリアは地方都市が楽しいとよく言われる。その地方都市に多いのが丘上都市である。

日本では、集落は、港湾、河川の近く、街道沿い、寺や神社の門前、と言ったところに発達している。その立地は、現代と同様食料の生産と集配に適したところでもある。

イタリアでも日本と同様な場所に発達するのは先のフィレンツェの例でも分かるが、実は圧倒的に多いのが丘の上、もしくは中腹に発達しているのである。少なくとも、第2次大戦までのイタリアでは、イタリアにある町(paese)の大半が丘の上に作られていると言っても過言ではない。



写真5 フィレンツェ(ミケランジェロ広場から)

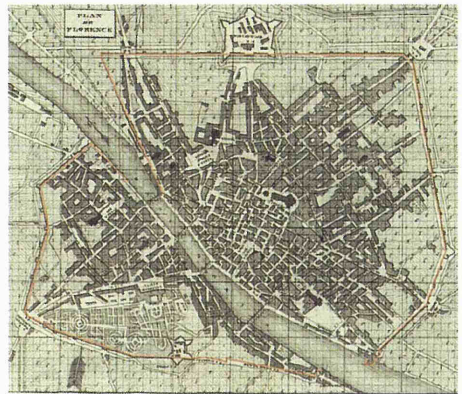


図3 6番目の城壁に囲まれたフィレンツェ
(1333年完成)※3

2・4 丘上都市と山岳都市

丘上都市の紹介はもう既に何度も国内で紹介されているが、そこでは「山岳都市」として紹介されている。我々日本人での「山岳」というイメージは、高い山々が立ち並ぶ景観である。ここで紹介するイタリアの都市は、奥深い山の中にあるようなものではない。平地からポコッと盛り上がった丘の上や、山の中腹に位置している。図4は、小さな山の上にある小さな町ベットーナの市街図を描いたものだが、真ん中に教会や役場のある広場があり、そこから四方に道が下っていく。黒い線が市壁でその中と外にぐると道が円周状に作られている。そして、その外は急傾斜地で、すぐ下に農耕に適した比較的平らな土地が広がっている。

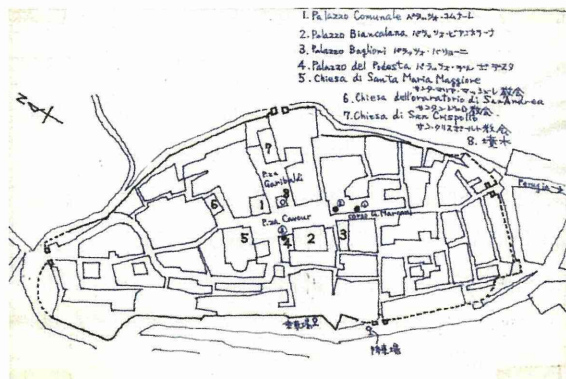


図4 ベットーナの市街図(ウンブリア州)

2・5 市民は市壁から出て農耕を行った

日本では丘の上の街はほとんど無い。山や丘の上に作る山城はあるが、丘の上の町は無い。これは日本の農業が稲作中心であったからである。稲作には平地が必要であり、常に田畑での維持管理が要求される米作りには、平地に住むことが必須であり、山の上の住居は不適であった。

一方のイタリアは、麦作りと酪農である。急傾斜で無ければ傾斜地でも農業ができる。そしてそれ以上に安全が重要視された(※4)。殆どの農民は市壁の中に住んでいたのである。

日が上がると家畜を連れて市壁の門をくぐって外に出る。丘の下に広がる緩やかな草原に牛や羊を放し、草を食んでいるのを一日犬たちと番をする。見上げると、丘の上に我が町の教会が一番高いところで輝いている。

夕方日が落ちる頃教会の鐘が鳴り響いて、ゆっくりと家畜を集めて、城壁内の我が家に向かって登り坂を帰っていく。それが市壁の中に住む農民の一日である。

日本のようにほとんどの農民が、自らの農地の近くに家を持つ国から見れば、現代の都市勤労者のように城壁内から農地に通勤する農民というのは奇異に見える。

イタリアの歴史は戦争の歴史だと書いた。敵から家族・財産を守ることは全てに最優先された。どのような不便でも耐える必要があったのである。そしてその安全のために作られたのが市壁であり、その市壁を作るのに丘が大変適していたからである。

傾斜を利用すれば、平地に作るよりもコストを抑えて作ることができる。いざ戦争となれば、敵の発見や、上部から弓などを射掛けることのできる丘の町は、攻め難いが大変守りやすい町なのである。

ちなみに首都のローマは、7つの丘の上に作られた町である。それらの丘が集合して大ローマが作られている。

2・6 ヴェネツィアも避難都市

ヴェネツィアが海の上に町を作った話は大変に有名な話だ。ゲルマン民族の大移動の際、ランゴバルド族の侵略から逃れるため、干潮時しか海面に現れない土地（ラグーナ：潟）の上に町を作って、外敵の侵入に備えた。海を天然の堀割にした訳だが、海の上に住む事で便利な事などほとんど無い。最悪なことは、水の確保である。

ヴェネツィアの飲料水の確保は、雨水を地下に集めてそれを井戸で汲み上げるというやり方である。と言っても雨の量が井戸水の量であるからには、水は大変貴重なものであったろう。20世紀になって、水を本土から水道管で送るようになるまで不自由を余儀なくされていた。

2・7 深い井戸を掘る

一方、丘の上の町でも水の確保は大変難しい。多くの町は、後背地を必要とした。後背地はそこより高い丘や山であって、そこから水を引いた。しかし、後背地を持たない丘上都市では、降った雨を溜める地下水槽を作るか、深い井戸を掘るしかなかった。ローマから北へ100kmほど行った断崖上に立つオルヴィエート（写真6）は、そんな町の典型である。（写真18）

何本もの深い井戸（サン・パトリツィオの井戸は深さ62m）が町を支えていた。今でもそれを見ることが出来る（写真7）が、岩（凝灰岩）を下に掘り下げる作業は大変な工事であったに違いない。そこまでして丘の上に住む意味があった訳である。それが外敵への備えであった。

イタリア人にとって安全が大変重要なものであったことを、我々はまず認識しなければならない。ただし、丘の上の街の利点は外敵への備えだけでなく、マラリア菌を媒介する蚊の脅威から逃れる為でもあった。（これについては別の項で触れたい。）

※3、5：ウィキペディアから

※4：イタリアでもミラノの西の地域ロンバルディア平原では、米作りが盛んである。平原での防御は川を利用し、陸からの敵の侵入にはやはり堅固な城壁を作っている。しかし、平地での防御は相当難しく、近隣の丘上都市との連携が重要であったようである。



写真6 オルヴィエート（ウンブリア州）の遠景※5

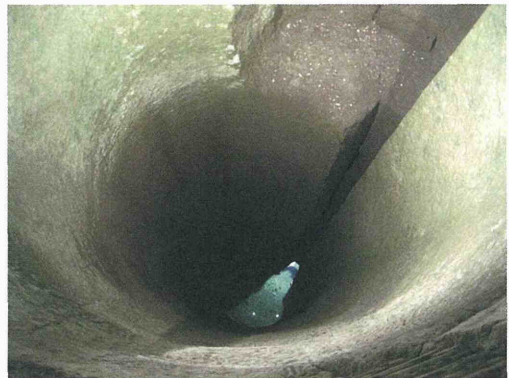


写真7 オルヴィエートの井戸

3. 戦争と平和のインテリア3

3・1 不便だけど丘の上の町は楽しい

イタリア・マルケ地方の景観は大変美しい。緩やかな丘が、畑と樹木と住宅で飾り立てられている様子はおとぎの国に来たようである。

そこでそれらの町々を車で回っていくと、我々是一个の町から次の町に行くということは、丘から降りて次の丘に登っていくことであることを知る。道は丘の上の町を網の様につなげている。網の結び目に当たるのが丘の上の町である。

今は住宅や工場などが平地に作られているが、まだまだ丘の上に住んでいる人が多い。慣れ親しんだ町を捨てるのは事変難しいのだろう。定年退職したら、子供の時のように幼な友達と郷里の丘の上の町で遊んで暮らしたいと、イタリア人は言う。

3・2 イタリアを自転車で走ってみた

筆者は、それらの街を自転車で走ったことがある。

2003年の夏にレンタサイクルを利用してウンブリアの州都ペルージャからナルニまで一日のサイクリングを挙行政した。挙行政とは大げさな、と言われそうだが、50代の筆者が行政なったことに対してイタリア人が「それは暴挙だ！」と言った。若者でもそんな無茶はしない、と言う。直線距離で約100km だから、日本でよく走っていた筆者にはそれほど無理な計画ではないと思っていた。日本から来る友人たちと、夕方7時にナルニのホテルで会うことを手紙で約束しての計画であった。

ところが、その行程は坂の連続であった。坂ではないところを走ろうと地図で探しながら走ったのだが、いつの間にか高速道路に入ってしまった。一般道路がそのまま高速道路に入っており、たぶん30km 近く高速道路を走ったと思う。途中からこれはまずいと思ったのだが、平坦道の道路は大変快適だったから、注意されないことをいいことに走って、でも、トンネルを前にして諦めた。トンネルを車と一緒に走るのはあまりに恐ろしい。

トンネル入口横の脇道の一般道に戻って坂道を登っていったのだが、これが苦しかった。

しかし工程は後半分。少し休んで、坂道を黙々と走って、目的地ナルニのホテルに到着したのは約束の30分後だった。彼らも電車が遅れたので、私の方が早く着いていたのでよかったのだが、私の消耗し切った姿に彼らはびっくりしたようだ。

イタリアの一般道は、坂ばかりである。道は町と町を結んでいる。町は丘の上にある。となれば、道は上り坂と下り坂で構成されているのは当たり前だ。そう言えば、一般の郊外行きバスは、それらの町をひとつずつ回っていくので、バスは上がったたり下がったりの連続で走っている。

これは余談だが、ナルニからの帰りは電車でペルージャに戻ったのだが、これは快適だった。単に電車だから、というだけでなく、走った自転車を吊って運んでくれる車両が普通に連結しているからだった。さすがイタリア、と感心したものである。

3・3 都市門は街道の入り口

町から外に出るところに市壁の出入り口がある。小さな町でもかなり立派な門がついている。(写真8)

門には名前が付く。ポルタ・ロマーナはローマの門という意味だが、このローマの名が付くのは、ここから出ると道はローマに通ずる、ということである。だからミラノ南東の門にポルタ・ロマーナがあり、これ以外にも東側にはヴェネツィアに通ずるポルタ・ヴェネツィア、南西にはポルタ・ジェノヴァがある。

3・4 市壁跡が作る都市の環状路

このミラノの町のように平地の町では、ずいぶん前に市壁を壊して門だけを残し、壊した跡は細長い公園や緑地帯にしたところ（ヴェローナやルッカなどの都市）、細長い町の区画で残っているところ（ミラノやフィレンツェ）など様々だが、市壁のあった当時は、市壁の内側と外側の2本の道路があったわけで、市壁を壊してその跡が細長く残されることになる。2本の道路があまり間隔を空けずに設けられているので、そこが市壁のあったところだとすぐ分る。

3・5 丘の上に大通りがあるペルージャ

ところが丘の上の町では、壁を作るのは簡単であったが、それがそのまま現在でも都市の地盤を構成する重要な構造になっている場合が多い。

ペルージャの中央通り（写真19）は、この町出身の画家ペルジーノ・バンヌッチの名前の付いたコルソ・バンヌッチである。ローカル鉄道の終着駅や地方行きのバスの発着所のパルティジャーニ広場から丘の上の町にエスカレータを3台乗り継いで昇って行くと、

真っ暗な地下都市（ロッカ・パオリーナ）に出る。ここからまた階段を上がると先ほどのコルソ・バンヌッチに出る（写真9）。エスカレータを上がると地下に出るというのも不思議だが、そこから上に上がると中世の町が現れるのが驚きである。

このタイムスリップしたような演出は、丘上都市だからできる表現で、下から上の町に上がるためエスカレータだけでなく、登山電車やケーブルカーなどが使われている町もいくつもある。（前出のオルヴィエートやベルガモなど）

3・6 大通りの下に町を作った

ところでペルージャのバンヌッチ通りだが、この通りは丘のテッペンにある。しかしドゥオーモから始まるこの大通りは、平たい通りがまっすぐ500 m続く。この立派な大通りが山の上にあることを考えるといかにも奇妙である。その端は断崖絶壁であり、ここに立つと、ウンブリアの沃野が一望に見て取れる。実はこの道は、大変な苦心の末に作られ



写真8 トゥレーヴィの北東の門



写真9 コルソ・バンヌッチ(ペルージャ)

た大工事の結果なのである。

図5を見て欲しい。丘の上を削り（左図）、逆に斜面に盛り土をして市壁と同時に人工地盤を造成したものである。傾斜地に住宅などを建て



図5 ペルージャの造成工事

るときに日本でもよく行われる手法だが、ペルージャのユニークなところは、単なる盛り土ではなく、その部分を地下都市にしたことである。

この地下都市はある時は牢獄に、ある時は市場にいろいろな使われ方をしたようだ。今でもその中を歩けるが、天井の高い不思議な魅力を持った空間である。

3・7 市壁に住むこともできる

丘の上は見晴らしが良い。敵の状況が容易に把握でき、攻められにくいので、日本でも山や丘の上に造られ、石垣の上に天守閣が設けられてきた。しかし日本の場合、町全部が城壁の中というわけではない。

ペルージャは、地下都市の市壁だけでなく、傾斜地にたくさんの市壁をまだ残している。それらはそのまま現在でも使われている。もちろん現在では、敵から守るためではなく、市壁が建物の外壁になっているからである。市壁が住居になったのか、住居を市壁にしたのかという議論は、イタリア人には無意味だろう。住居も城壁も外敵から市民や家族を守るためのものだからである。この辺は、日本人にはなかなか理解が難しいと思う。

そして、初めてその市壁を見た者には、それが元からの傾斜地盤に石を組んだものなのか、新たに造成されて造られた建築構造物なのかがはっきりわからない。だから城壁の中が土や石が詰まっているのか、空間があって人が住んだり、物の倉庫になっているのかもわからない。そして、石で組まれた市壁の上方に、窓が開いているのを見つけてびっくりする。そこから洗濯物が広げられていたり、カーテンがかかっていたりするとおさらだ。

一方の日本、平らな土地に木で組み上げ、土壁と建具で囲んだ我々の住居の風景からすると、イタリアの住居の概念には大きな違和感を感じる。

町全体がぐるりと切り立った崖状の市壁に囲まれた丘上都市は、そのまま全部が城塞のように見える。その王冠のような城砦のある町のたたずまいは、丘や山の形状によって異なる。だからであるが、戦争が作った町かも知れないにしても、ひとつひとつの町に個性があり、町を巡り歩く旅は興味の尽きない楽しいものになっている。

4. 住居に見る安全意識

4・1 イタリアの塙

イタリアの街を歩くと、そこが大都市であろうと、500人くらいの小さな町でも昔からの街では、建物は道の両側に隙間なく建てられていることがわかる。

ところが、丘の上の街でも初めは、塙の中に庭や畑があり、家が建てられていたようだ。今でもその頃のままだ家を見つけることができる。しかし狭い市壁の中の人口が増えると、庭を潰して住居に変え、塙は建物に変わっていったようだ。と言っても、塙も建物の外壁も同じように石やレンガで作られるので、その差がすぐにはわからない。入り口からのぞき見ると雑草の追ひ茂る空き地であったり、美しく手入れされた庭園だったりする。

現在、イタリアでは不便な丘の上から抜け出し、下の平地に住居をつくる事が増えている。そこに建てられた住居は連続して建てられていない。現在の法律は、消防法から建物間に一定の距離を取るよう定めている。その形は日本の住居のように塙の中に庭があり、庭の中に一戸建住宅も集合住宅も建っている。しかし、ここで考えさせられるのは、住居を塙で守るというより、住居で敷地全体を守っているように見えることだ。

日本のように生垣や板塙の方が住居より立派というような事はなく、建物はしっかりと造られ、その堅固さを主張している。だから、居住者の住居意識は家の範囲に留まっており、その外に展開する庭空間まで及んでいない。地階（日本の1階に当たる階は地階という。）には小さな窓が作られ、頑丈な鉄格子がはめられる。大きな窓は駐車場の入口であり、頑丈なシャッターが設けられている。

4・2 日本の塙

一方、日本の都市部の住宅は、今まで戸建住宅が一般的であり、その一軒一軒が生垣や板塙で囲われている。生垣や板塙の中は小さな庭でその中に西洋から見ると甚だ開放的な住宅が建っている。生垣や板塙に比較するといささか貧弱に見える。イタリア人から見たら、防犯的には大変不安な住宅だと言われかねない。手慣れたイタリアの盗賊にとっては、日本の住宅は赤子の手をひねるようなものだろう。大きなガラス窓は、いかようにも壊せる事ができ、壁そのものを壊して侵入する事もそれほど難しくなさそうだ。しかし幸いなことは、日本にはイタリアほど手荒な強盗は居ないということだ。

この日本の家の薄く軽い造りは、大きな窓とあいまって開放的な住居イメージを作っている。住居の中から見た場合、採光の面だけでなく、大きな窓からの外の景色は大きな絵画のような意味合いを持っている。外の景色、特にその景観が自由になる専用の庭の場合、住空間は庭の範囲まで拡大しているといって良いだろう。となれば、日本人の住居の意識は庭にまで及んでいるといって良い。住居は塙や門を境に外部と接している事になる。日本のインテリアに大きな意味を持つ「山を借景とする」という文化は、1階部分の開放性を抜きにしては語れない。イタリアにおける「外の景色」は、外で鑑賞するものであり、2階以上から見下ろす文化である。

4.3 パラッツォに見るセキュリティー

イタリアの住宅は、外敵の侵入を防ぐ城壁になっているのだが、壁に隙間があってはな

らない。隙間なく連なった建物の外壁は堅固に作られ、入口は厚い大きな扉がはめられる。入ると中に方形の中庭が設けられている。この庭の目的は①通路、②採光、③通風、④作業場所、⑤集会所等であるが、②の採光が重要である。隣の建物との隙間が無いので、中庭からの採光に頼らざるを得ない。この中庭は、家の中といって良いだろう。

この中庭は、ちょっとした都市のパラッツォで見ることができる。パラッツォの語源は宮殿の意味だが、15・6世紀のルネッサンス時代に栄えたフィレンツェにおいて、役場、司教館などとともに、富裕な貴族や商人などの住居を呼ぶようになった。代表的な例はフィレンツェ市内のメディチ家の館（Palazzo Medici-Riccardi）などだが、それらパラッツォは1階には堅固な外壁に鉄格子のついた小さな窓、重く大きな入口扉があり、見上げると上に行くに連れて階高が低く作られた建物は実物以上に巨大な外観で、大変に威圧的・閉鎖的な建物になっている。ところが内部に入ると柱廊で囲まれた大変優雅な中庭に出る。この中庭から階段で上階に上がるが、大変開放的で伸びやかな空間である。外に対して厳しく、中には穏やかなこの対比は印象的である。この形式はその後の他の都市、そしてヨーロッパ全域での流行となるが、この口の字型間取りは、イタリア人のそしてヨーロッパ人の特徴的な性格を表しているように思えるのだが、どうだろうか？

4・3 オアシスを持った内部空間

中に庭を抱えるこの形式は、集合住宅として発展し、真ん中に噴水を作ったり、井戸を設け水汲みの社交場となったり、木々を植えてちょっとした林のようにしたところも出てくる。地中海地域の国々では、北アフリカも含めて皆同様の口の字型プランが多い。これは現在のミラノやローマでも同じ状況を見ることができる。全てが石やレンガで囲まれた街路から、足を止めて、開かれた建物の内部を覗き見ると、緑の多い、オアシスのような景色を発見することができる。イタリア人は決して緑の全く無い日々を過ごしているわけではない。ただ、ちょっとセキュリティに敏感と言うわけだ。

4・4 京の町屋

日本でも京都の町屋では、連なる住宅の中に中庭を有しており、その構成は西洋的であるといって良いだろう。その庭は屋敷の中の緑の配された部屋といっても過言ではない。客用の玄関の間に上がろうとすると、正面に2間4方くらいの中庭が見える。これは客人



写真 10 パラッツォ・メディチ・リッカルディ



写真 11 パラッツォ・メディチ・リッカルディ内部庭園

をもてなす絵画や盛り付けた花の役目を持っているといえよう。単に、土地に住居を建て、残った土地を庭にしているものではない。

この町屋の考え方と同様、イタリアの古い街の住居は中に方形の庭を持っている。町屋と異なるのは、住居が集合住宅である事であり、その平面図が口の字型やコの字型をしている事である。住居の明かり取りの窓がこの中庭に向けて作られている。20世紀になるまでは、ここは馬や馬車の出てくる場所であり、中庭に面した部屋は、厩舎や馬車の格納されたところになっていた。馬が交通の手段として重要だった時には、馬が通るために門扉は大変大きい。

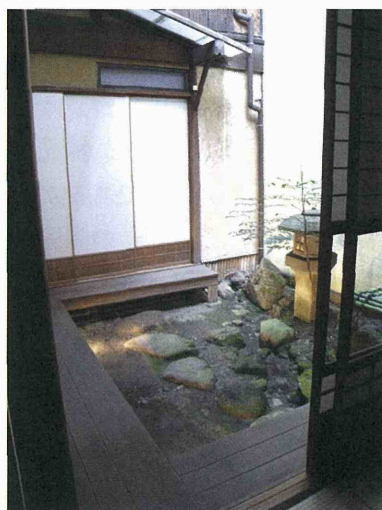


写真 12 町屋の中

日本でも武家屋敷のように馬を家の中に飼っていた家では、扉は随分と大きい。農家ではない都市部の町方の家では、馬の使用はなく、現代の日本の家に大きな扉を見ることは稀である。東北地方のカギヤのように一部で馬の入口とひとの入口がいっしょになっているところがあるが、珍しい。

イタリアの都市の中庭は、その奥にもっと大きな中庭を持つ事がある。そこは通路として使用する場所ではなく、植栽が豊かに茂る緑地帯になっている。市壁の中の密集する住居群を維持するには、中庭の存在抜きにその構成を語る事はできない。

5. 接客のインテリア

5・1 イタリアのエントランス

都市部における口の字型の住宅（パラッツォ）を紹介したが、住居は中庭から階段を登ったフロアにある。現在では1階（イタリアでは地階）部分は店舗や住宅の一部、ガレージになっている。

前にも触れたが、イタリアの農村部でも人々は市壁を造り、出来るだけ集まって暮らしていた。ここでの住居も地階は家畜場にされる場合が多いが、調理や食事空間も通常はこの地階に設けた。寝室は、2階に設けられたが、これは防犯上の事以外に湿気を嫌ったからである。

5・2 玄関 (ingresso)

イタリアの玄関は、外と中を画然と分けている。しかし、日本人に、どこまでが玄関かと言われたらイタリア人は困るに違いない。イタリア人には、玄関という空間よりも、扉の存在そのものが全てと言ってもいいだろう。扉の内と外には、日本人が思う以上に大きな差を抱いているに違いない。それらの住戸に友人たちを訪ねてみると、防犯



写真 13 丘の町の住戸のエントランス

意識が我々日本人とはずいぶん異なっているのがわかる。

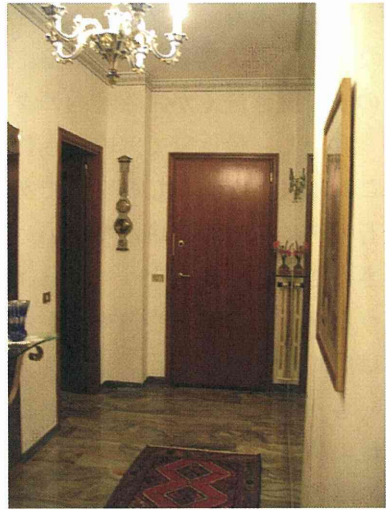
まず、イタリアの入口扉は内側に開く形式である。日本の扉は逆の外開きである。日本の扉が外開きの理由は、玄関で靴を脱ぐからであり、脱いだ靴が置かれていたら内開き扉がぶつかってしまうからである。それ以外に、雨が中に降り込むことを防ぐためであったり、その雨が中に流れ入るのを防ぐため玄関土間が中に向かって高くなっているので扉が土間にぶつかってしまう。また、地震があったらすぐ飛び出せるからだとも言う。これだけ理由があれば、内開きなど考えられないのが日本人だが、イタリアの家のエントランス扉は内側に開く。

5・3 イタリアの泥棒は扉を壊す。

日本の泥棒は鍵をはずして中に入る。ところがイタリアでは、扉そのものを壊しにかかるのである。扉が壊れなければ壁を壊す。イタリアの盗賊は大変乱暴だ。

イタリアの玄関扉の頑丈さは我々の想像を超えている。直径が2cmほどの鉄の棒が壁の中に5cm～10cm 入る鍵である。これが上下左右に壁の中に突き入る仕掛けだ。そんな扉は大変に高価である。その金額を聞いたら、それで守るそれ以上の価値ある財産が家の中にあるとは思えないほどだ。

鍵が頑丈だったら扉を壊すから、扉を頑丈にする。そんな状況だから扉を建物に取り付けている回転軸(丁番)を外に露出するなどとはもってのほかである。石やレンガで造られた厚い壁の出入り口では、木や鉄製の扉枠を出
写真 14 イタリアのエントランス
入り口の内側に取り付けている。内部に取り付けることで扉を壊され難くしているのである。



地震も怖い。この間もイタリア中部に大きな地震があって多数の死傷者が出た。イタリアも地震国なんだと初めて知った人もいたはずだ。しかし、地震で外に出やすい外開きの扉を手に入れるより、盗賊や敵の侵入を防ぐ中開きの扉が何より重要なのである。

5・4 イタリアの玄関には靴箱が無い。

イタリアの家の扉は内開きだとするなら、扉が何かにぶつかったりしないのか？日本の玄関の状況を見慣れている我々には、いくら靴を脱がないイタリア人だってスリッパぐらいには履き替えるし、入り口にはいろいろあるに違いないと思う。でも扉を押して入ると、床は何の段差も材料の違いもなく、奥にそのままつながっているのを発見する。あっけなく何もない。無いほうが良い。ここは客を迎えるところであり、握手や抱擁しての挨拶の場だからである。大きなゼスチャーで迎える彼らには邪魔なものがあってはいけない。

あえて言えば、コート掛けなどがある。といっても3・4個のフックが壁から突き出ているか、独立式の木製などのコート掛けである。この独立式のコート掛は、いつも置いてあるというより、来客時に別の場所から持ってくる人が多いようだ。鏡にしても廊下の

一部に取り付けられているだけだし、ちょっとした棚があっても、決まったものを乗せるわけでもない。

花瓶や額など賑やかな日本の玄関と比べると大変にあっさりしている。これらは全て、入り口で靴を脱ぐ習慣がある日本人と、脱がないイタリア人の大きな違いが作ったものだ。

5・5 靴はどこで脱ぐ？

話はセキュリティーから外れてしまったが、玄関で脱がない靴はどこで脱ぐのか？

寝室である。イタリア人は元来、靴を一日中履いていた。脱ぐのは寝るときである。脱いだ靴はベッド脇にそのまま脱ぎ置くか、寝室内のクローゼットに収納する。

しかし、最近家で室内履きに履き替える人が増えた。これは大きな暮らしの変化である。理由の一つは健康面。石やタイルの床は冷たく硬い。高齢者にとってこの冷たさ硬さはこたえるようである。日本人の木や畳の床のようなソフトな踏み心地や暖かさはない。だからカーベットの敷いているのだが、到底畳には勝てないだろう。

もう一つは靴の締め付けから足を開放することだ。イタリアの広告のおなじみの一つが、足の病気から守る健康靴（室内履き）の宣伝である。想像以上にイタリア人の足首や足指の障害は重大である。足を引きずって歩く老人の姿をよく見る。

そして、玄関や玄関脇の台所に室内履きを置く家庭が出てきた。家に入ったら、そこから後は、全て寛ぎの空間というわけだ。

5・6 家の中は私的、公的空間が分かれていた。

元来、家の中は寝室とその隣のトイレ・浴室だけがプライベートな空間であった。そこ以外はパブリック空間であって、きちんとした服装でなければいけない、つい最近までヨーロッパの良家ではそういう教育がされていたのである。それは、ホテルの個室から一歩出たら、スリッパ・パジャマ姿ではいけない、という西洋作法の世界である。それが今、崩れつつある。



写真 15 サンドナートミラネーゼの我が家からミラノの市街方向を見る（留学時 1982 年）